

初対面状況の違いがパーソナリティ認知に及ぼす効果

福田 真知*1・廣岡 秀一*2

The Effects of Situational Factor on Personality Cognition in the Initial Encounter.

Machi FUKUTA and Shuichi HIROOKA

要 約

本研究は、初めて出会う相手に対して感じる親密さと、出会った後に相手とどのような関係を築いていこうとするかという対人期待を取り上げ、それが様々な初対面場面における対人認知にどのように影響していくのかについて検討を加えるものである。大学生 249 名を対象に質問紙調査を行った結果、これまでの先行研究の結果と同様に、パーソナリティ認知構造として「力本性」、「個人的親しみやすさ」、「社会的望ましき」が見出された。また、初対面状況におけるパーソナリティ認知には、被認知者の要因が大きな影響をもたらしていることが示されたが、初対面場面と被認知者の交互作用も確認されており、初対面状況の違いがパーソナリティ認知に少なからず影響していることが示された。

Key words : パーソナリティ認知、初対面状況、対人関係期待、親密性

I. 問題と目的

対人認知プロセスにおいては、様々な要因が複雑に絡み合っただけでなく、それらの要因は、①認知者の要因、②被認知者の要因、③状況の要因に分けることができる (Tagiuri, 1958; Shrauger & Altrocchi, 1964)。従来、認知者や被認知者の要因に関しては比較的多くの研究がなされてきたが、状況の要因を扱った研究はそれほど進んでいないと言える。しかし、Mischel (1968) の「状況主義論」の研究に始まり、個人的要因と状況的要因のどちらも人間の社会的行動の決定因であり、それらがお互いに作用し合っているという「相互作用論」(Bowers, 1973) も提唱されており、無視できない要因となっている。

われわれは、相手との初対面場面において相手がどのような人であるのかということを考える。しかし、同じ人が同じ相手と出会う場合であっても、その相手と出会った場面や相手に対して持っている期待などの状況によって異なる要因に影響をうけて、相手に対す

るパーソナリティ認知において暗黙裡に注目する側面が異なってくることも考えられる。例えば、サークルなどのうち解けた場所で相手と初めて会う場合と、ゼミなどの緊張した場所で会う場合とでは、同じ相手に対しても、相手のどの部分を認知の手がかりとするかが異なっていることは容易に想像できる。

Crockett ら (1975) は、聞き手である被験者を「理解する」というセットと、「評価する」というセットを設定し、話し手への印象がどのように変化するかを検討している。その結果、相手を「評価する」セットよりも「理解する」セットの方が認知次元の数が少ないこと、また、相手を「理解する」セットの方が、「評価する」セットよりも話し手をより好意的に認知することを見いだしている。日本においても宮本・山本 (1994) が、日常生活における他者の連続行動に焦点を当て、観察者が連続行動をどのように観察しているのかを検討した研究において、他者の連続行動に注目して観察させる記憶群と、相手がどのような人物であるのかに注目して観察させる印象群に分けて他者の連続行動を観察させ、それぞれの群によって情報処理

*1 三重大学大学院教育学研究科学校教育専攻

*2 三重大学教育学部 <mailto:shuhiro@edu.mie-u.ac.jp>

の仕方が異なることを報告している。つまり、対人相互作用の状況的目的 (goal) を持つことによって、相手に対するパーソナリティ認知プロセスに、ある種の方向性を与えることになるのではないかと考えることができる。

また、目的と類似した状況的変数として、被認知者に対して抱く期待や感情をあげることができよう。弓削 (1994) は、付き合いの長さに関わらず、その時の自他の関係の親密さにより他者認知が異なることを明らかにしている。また、Rosenthal ら (1968) による教師期待効果などからも分かるように、人が他者に対して持つ期待は、意識するかどうかに関わらずこの期待が成就するように機能することが知られている。池上 (1997) は、自己スキーマが印象形成過程に及ぼす効果を友好性と知性の 2 次元から検討した研究において、事前情報によりポジティブな期待が形成された場合とネガティブな期待が形成された場合に、期待と一致する行動の記憶が促進される程度がどの程度異なるかということを検討している。その結果、ポジティブな期待をいだくことにより、それと合致する正の評価的価値を持った行動情報の処理が促進されたことを報告している。つまり、相手に対するポジティブな期待が、認知者に相手のよい行動に注目させ、結果として相手に対するよりポジティブなイメージへ結びついていくのである。

本研究は、初めて出会う相手に対して感じる親密さと、出会った後に相手とどのような関係を築いていこうとするかという対人期待を取り上げ、それが様々な初対面場面における対人認知にどのように影響していくのかについて検討を加えるものである。

ところで、Forgas ら (1979) は、パブ、コーヒータウン、パーティ、ゼミといった日常的な対人場面という状況的要因が対人認知にどのような影響を及ぼすのかを検討している。その結果、ゼミでは「支配性」及び、「創造性」、「支持」の次元が、パブにおいては「評価」及び「外向性」の次元がそれぞれ主要な次元として抽出され、状況によって顕現的な認知次元が異なることを明らかにしている。日本においても廣岡 (1985) が、ゼミ、コンパ、デートの 3 つの対人場面と 6 人の人物の行動特徴が示されたものを組み合わせ被験者に呈示し、それぞれの人物についてのパーソナリティを評定させた結果、ゼミにおいては「社会的望ましさ」の次元が、コンパにおいては「個人的親しみやすさ」、「力本性」の次元が重視されていることを明らかにしている。また、廣岡 (1985) は、対人場面における認知的側面について検討し、状況認知次元として「親密性」、「課題志向性」、「不安」の三次元を抽出している。状況認知次元の「親密性」は、「個人的

親しみやすさ」の次元に、「課題志向性」は、「社会的望ましさ」にそれぞれ対応しているとしている。これをもとに廣岡 (1990) は、それぞれの次元上で特徴的に認知されていた場面を独立変数として用い、パーソナリティ認知に及ぼす対人場面の効果について検討し、同じ行動であったとしても、行動の背景となる場面によってパーソナリティ特性への帰属の仕方が異なることを示している。このことから、初対面で同じ人物が同じ人物と出会う場合であっても、出会った場面が異なれば、同じパーソナリティ特性であっても、注目する程度が異なるのではないかと考えることができる。

本研究では、状況認知次元である「親密性」、「課題志向性 (社会的望ましさ)」、「不安」の 3 つの次元をそれぞれ特徴的に表すような場面を設定し、さらにそれぞれの場面について、一般に大学生の日常生活において友人になるなど何らかの対人関係を築くために、重要性が高いと考えられる場面、重要性が低いと考えられる場面の 2 つの条件を加え、合計で 6 つの場面を設定し、さらに、刺激人物については、同じような観点から親密性、相手に対する対人関係期待の高低によって 6 人の人物を設定することによって、仮想的な対人認知場面が記述された質問紙を構成し、初対面時の対人認知に及ぼす状況要因の影響についての検討を試みる。

仮説：同じ人物に対する紹介文であっても、その背景となる場面状況によって認知されるパーソナリティは異なる。

II. 方 法

1. 調査対象者

皇學館大学、三重県立看護大学、三重短期大学、三重大学大学生及び大学院生を対象に質問紙調査を実施した。調査対象は、249 名 (男性 92 名、女性 157 名)、平均年齢 20.3 歳であった。

2. 調査時期

2003 年 12 月に実施した。

3. 調査方法

三重大学生は、講義開始直後に一斉調査を行った。その他の大学については個人的に調査を依頼し、その場または家で実施してもらった。質問紙回答に要した時間は約 15 分程度であった。

4. 質問紙の構成

4-1. 質問紙の組み合わせ

6つの対人場面と6人の刺激人物をそれぞれ組み合わせ、36通りを作成し、場面と人物を重複して評定することのないようにそれらのうち6つを抜き出して組み合わせたものを1つの質問紙とした。つまり、質問紙を全部で6パターン作成した。作成した質問紙に被調査者を各パターンにつき約40名ずつランダムに割り当て、場面と刺激人物の紹介文を組み合わせたものを被調査者に呈示し、それぞれの状況における人物についてどのような人物であると感じたかを評定させた。

4-2. 対人場面について

初対面場面を廣岡（1990）にしたがって「親密性（個人的親しみやすさ）」、「課題志向性（社会的望ましさ）」、「不安」の3次元それぞれについて、大学生の日常生活において対人関係を継続していくために重要であるか（重要性—高）、重要でないか（重要性—低）という重要性の2次元から設定した。つまり、それぞれの次元においてそれぞれの次元に対応し、かつ大学生の日常生活において違和感のない場面であり、認知者（大学生）がある程度対人関係を継続することが望まれる場面とそうでない場面を2場面ずつ、合計6場面設定した（資料1～6）。具体的には、「課題志向性（社会的望ましさ）」の次元においては、大学生にとって課題志向的な場面であり、大学生生活の大半を占める講義に参加する場面を取り上げ、対人関係における重要性が高い「講義（半期間継続）」場面と重要性が低い「講義（1回限り）」場面を設定した（資料1～2）。「親密性」の次元においては、大学生が私的に活動を行うような場面を親密性の場面として考え、対人関係における重要性が高い「サークル」場面と重要性の低い「単発アルバイト」場面を設定した（資料3～4）。そして、「不安」の次元においては、予期しない場所で出会う場面や、緊張するような場面を「不安」の次元に対応する場面と考え、対人関係における重要性が高い「長期アルバイト」場面と重要性が低い「道ばた」場面を設定した。（資料5～6）。

4-3. 刺激人物について

刺激人物（SP）については、親密性の高低と認知者に対する対人関係期待の高低によって4種類の人物を設定した。つまり、親密性の高低と、被認知者である刺激人物が、認知者と初対面場面以降も友人としてつきあっていきたいと考えているかどうかという対人関係期待の高低によって4人の刺激人物を設定したということである（資料7～10）。さらに統制人物とし

て、親密性と相手に対する対人関係期待を記述しない人物を2種類設定し（資料11～12）、合計6種類の人物をSPとして設定した（資料7～12）。

4-4. パーソナリティ評定尺度

廣岡（1990）で使用されたパーソナリティ評定尺度の因子分析結果から、「個人的親しみやすさ」、「社会的望ましさ」、「力本性」の各因子に高い負荷を示した尺度から、初対面場面の人を評定する項目としてふさわしいと考えた項目を6項目ずつ選択し、計18項目の評定尺度を作成した。すでに記述した場面とSPの紹介文を組み合わせた文章を被調査者に呈示し、それぞれの状況における人物についてどのように感じたかを5段階で評定させた。具体的には、3を「どちらでもない」として、それぞれ1、5に向かうほど各項目の形容詞について「非常にそう思う」となる5段階で評定させた。

III. 結 果

1. 分析対象者

調査対象者のうち、243名（男性89名、女性154名）を分析対象とした。平均年齢は20.3歳であった。

2. パーソナリティ評定尺度の検討

初対面場面と刺激人物を組み合わせたすべての条件を無視して、18対のパーソナリティ評定尺度の因子分析を行った。したがって、この因子分析を行う際のケース数は、1458（243×6）となる。

全18項目について、廣岡（1990）に従い、主因子法・バリマックス回転による因子分析を行った。その結果、廣岡（1990）とほぼ同様の結果が得られた。第1因子は、「11, にぎやかな—静かな」、「9, 内向的な—外向的な」などの項目に高い因子負荷が見られ、「力本性」因子と命名した。第2因子は、「2, 感じのよい—感じのわるい」、「14, つめたい—あたたかい」などの項目に高い因子負荷が見られ、「個人的親しみやすさ」因子と命名した。第3因子は、「7, 責任感のない—責任感のある」、「8, しっかりした—たよりない」などの項目に高い因子負荷が見られ、「社会的望ましさ」因子と命名した。

この3因子で全分散の約69%が説明されており、廣岡（1990）の因子分析結果と類似していることから、非常に信頼性の高い因子構造であることが示された。よって、パーソナリティ評定3下位尺度を設定し、合成得点を算出し、その後の分析を行った。

3. 初対面場面と刺激人物がパーソナリティ認知に及ぼす影響

各因子における初対面場面 (6) × 刺激人物 (6) の 2 要因分散分析を行った結果 (Table1)、「力本性」、「個人的親しみやすさ」、「社会的望ましさ」全ての因子において刺激人物の主効果が有意となっており、この研究で設定した刺激人物の記述は認知者が刺激人物のパーソナリティ評定を行う際の大きな規定因となっていたとみなすことができる。「個人的親しみやすさ」の因子においては場面と刺激人物の交互作用 (F (25, 1425) = 2.11, p < .01) が有意であり、「社会的望ましさ」の因子においては、場面の主効果 (F (25, 1425) = 2.85, p < .05)、および場面と刺激人物の交互作用 (F (25, 1425) = 1.80, p < .01) が有意であった。これは、廣岡 (1990) と部分的に一致する結果である。つまり、初対面場面においても、刺激人物の要因だけではなく、その人物がどのような場面にいるかということが認知の手がかりになり得るという結果と解釈可能である。「社会的望ましさ」の因子における場面の主効果について Tukey 法による下位検定を行った結果、「講義 (1 回限り)」場面と「長期アルバイト」場面 (p < .05)、「単発アルバイト」場面と「長期アルバイト」場面 (p < .05)、「サークル」場面と「長期アルバイト」場面 (p < .05)、「道ばた」場面と「長期アルバイト」場面 (p < .05) に差がみられた。それぞれの場面は、「長期アルバイト」場面よりも「社会的望ましさ」を高く評定していた。ちなみに、性の要因も含めて検討したものの、有意な結果は

みられなかった。

次に、各刺激人物ごとに初対面場面を独立変数に、パーソナリティ評定尺度の因子分析結果から得られた各因子の合成得点を従属変数として 1 要因の分散分析を行った (Table2)。その結果、「力本性」の因子ではどの刺激人物においても差はみられなかった。「個人的親しみやすさ」の因子では、人物Ⅱ (F (5, 242) = 2.63, p < .05)、人物Ⅲ (F (5, 242) = 2.32, p < .05)、人物Ⅳ (F (5, 242) = 2.20, p < .05) の刺激人物において初対面場面による有意な差がみられた。また、「社会的望ましさ」の因子では、人物Ⅱ (F (5, 242) = 3.80, p < .01)、人物Ⅵ (F (5, 242) = 2.36, p < .05) においては初対面場面による有意な差がみられた。このことから、部分的ではあるが、同じ人物であっても、背景となる初対面場面が違えば、対人認知が異なるということが示唆され、仮説を部分的に支持するものと考えられる。

また、全ての刺激人物において性差を考慮して初対面場面 (6) × 性 (2) の 2 要因の分散分析を行ったが、性による差は有意ではなかった。

以下では、「個人的親しみやすさ」の因子において各刺激人物がどのように認知されたかを中心に、刺激人物の親密性と対人期待との関連について検討を試みる。なお、刺激人物Ⅴと刺激人物Ⅵは、統制人物として設定されているので、ここでは検討対象とはならない。

「個人的親しみやすさ」の因子における各刺激人物の平均を表したのが Table3 である。以下、この平均に基づいて各刺激人物のパーソナリティ認知の特徴を検討する。

Table 1 各因子得点における 2 要因分散分析

変動因	df	力本性		個人的親しみやすさ		社会的望ましさ	
		MS	F 値	MS	F 値	MS	F 値
場面	5	4.32	.360	8.93	.760	17.12	2.85*
刺激人物	5	9126	750.3**	4580.49	389.54**	436.84	72.64**
場面×人物	25	14.43	1.17	24.85	2.11**	10.82	1.80**
誤差	1461		12.16		11.76		6.01

* p < .05、** p < .01

Table 2 各刺激人物の 1 要因の分散分析

刺激人物	場面	df	力本性		個人的親しみやすさ		社会的望ましさ	
			MS	F 値	MS	F 値	MS	F 値
刺激人物Ⅰ	場面	5	7.14	0.73	4.54	0.46	8.36	1.57
刺激人物Ⅱ	場面	5	12.8	0.75	41.98	2.63*	27.42	3.8**
刺激人物Ⅲ	場面	5	4.82	0.44	23.22	2.32*	4.12	0.65
刺激人物Ⅳ	場面	5	14.9	1.16	28.89	2.2*	9.81	1.52
刺激人物Ⅴ	場面	5	17.8	1.59	23.61	2.25	11.09	1.92
刺激人物Ⅵ	場面	5	17.1	1.51	6.87	0.76	13.1	2.36*

* p < .05、** p < .01

Table 3 「個人的親しみやすさ」因子における各刺激人物の項目平均

		刺激人物Ⅰ	刺激人物Ⅱ	刺激人物Ⅲ	刺激人物Ⅳ	刺激人物Ⅴ	刺激人物Ⅵ
講義 (1 回限り)	Mean	4.20	2.62	2.73	2.36	3.35	3.48
	(SD)	(3.02)	(2.19)	(3.16)	(3.38)	(3.80)	(2.60)
講義 (半期間継続)	Mean	4.14	2.66	2.80	2.09	3.57	3.37
	(SD)	(3.34)	(2.15)	(2.53)	(4.56)	(3.51)	(2.62)
単発アルバイト	Mean	4.05	2.68	2.77	2.24	3.37	3.31
	(SD)	(3.05)	(2.02)	(3.51)	(3.68)	(2.26)	(2.95)
サークル	Mean	4.13	2.30	2.78	2.44	3.63	3.37
	(SD)	(2.84)	(1.87)	(3.85)	(3.35)	(3.37)	(3.53)
道端	Mean	4.13	2.54	3.04	2.32	3.44	3.36
	(SD)	(3.41)	(1.73)	(3.13)	(3.03)	(2.92)	(3.32)
長期アルバイト	Mean	4.14	2.68	2.85	2.32	3.52	3.42
	(SD)	(3.14)	(1.59)	(2.57)	(3.98)	(3.31)	(2.89)

刺激人物Ⅰについて

刺激人物Ⅰは、親密性、認知者への対人関係期待ともに高い人物設定であった。つまり、人付き合いなどがよく、認知者に親しさを抱かせる程度も高い。つまり、認知者に対して好意的で、認知者とはその後、友人としてつきあいたいと思っている人物である。この刺激人物Ⅰについて、パーソナリティ評定尺度の因子分析結果から得られた3つの因子を従属変数とし、初対面場面を独立変数とした1要因の分散分析を行ったが、どの因子においても有意な結果は得られなかった。ただ、Table3から明らかなように、他の刺激人物と比較すると、「個人的親しみやすさ」次元での認知は、いずれの場面においてもかなり高い。

刺激人物Ⅱについて

刺激人物Ⅱは、親密性が高いが、認知者への対人関係期待の低い人物設定であった。つまり、人付き合いなどもよく、認知者に親しさを抱かせる程度は高いが、認知者に対する好意は低く、認知者とはその後、友人としてあまりつきあいたくないと思っている人物である。この刺激人物Ⅱについて、刺激人物Ⅰと同様にして1要因の分散分析を行った結果、「個人的親しみやすさ」因子 ($F(5, 242) = 2.63, p < .05$) と「社会的望ましさ」因子 ($F(5, 242) = 3.80, p < .01$) において有意な差がみられた。そこで、それぞれの因子において Tukey 法による多重比較を行った。その結果、「個人的親しみやすさ」因子において「単発アルバイト」場面と「サークル」場面の間に有意な差がみられた。さらに、「サークル」場面と「長期アルバイト」場面の間においても有意な差がみられた。「サークル」場面と「長期アルバイト」場面では、「長期アルバイト」場面の方が「個人的親しみやすさ」因子を高く評定している。つまり、「サークル」場面の方が「個人的親しみやすさ」が低く認知されていることが読み取れる。

ちなみに、「社会的望ましさ」因子においては、「サークル」場面と「長期アルバイト」場面の間に有意な差がみられた。「サークル」場面と「長期アルバイト」場面にも差がみられ、「サークル」場面の方が「社会的望ましさ」因子を高く評定していることが示された。また、「道ばた」場面と「長期アルバイト」場面の間にも有意な差がみられ、「道ばた」場面の方が「社会的望ましさ」が高く評定されていることが示された。

刺激人物Ⅲについて

刺激人物Ⅲは、親密性が低く、認知者への対人関係期待の高い人物設定であった。つまり、人付き合いなどが苦手で、認知者に親しさを抱かせる程度が低いが、認知者には好意的で、認知者とはその後友人としてつきあいたいと思っている人物である。この刺激人物Ⅲについて、刺激人物Ⅰ、Ⅱと同様にして1要因の分散分析を行った結果、「個人的親しみやすさ」因子 ($F(5, 242) = 2.32, p < .05$) のみに有意な差がみられた。そこで、「個人的親しみやすさ」因子において Tukey 法による多重比較を行った。その結果、「講義 (1 回限り)」場面と「道ばた」場面の間に有意な差がみられた。「道ばた」場面においては他の場面に比べて「個人的親しみやすさ」因子が高く評定されている。

刺激人物Ⅳについて

刺激人物Ⅳは、親密性、認知者への対人関係期待ともに低い人物設定であった。つまり、人付き合いなどが苦手で、認知者に親しさを抱かせる程度が低い。また、認知者に対する好意も低く、認知者とはその後、あまり友人としてはつきあいたくないと思っている人物である。この刺激人物Ⅳについて、他の刺激人物と同様に1要因の分散分析を行った結果、「個人的親しみやすさ」因子 ($F(5, 242) = 2.20, p < .05$) のみに有意な差がみられた。そこで、「個人的親しみやすさ」因子において Tukey 法による多重比較を行った。そ

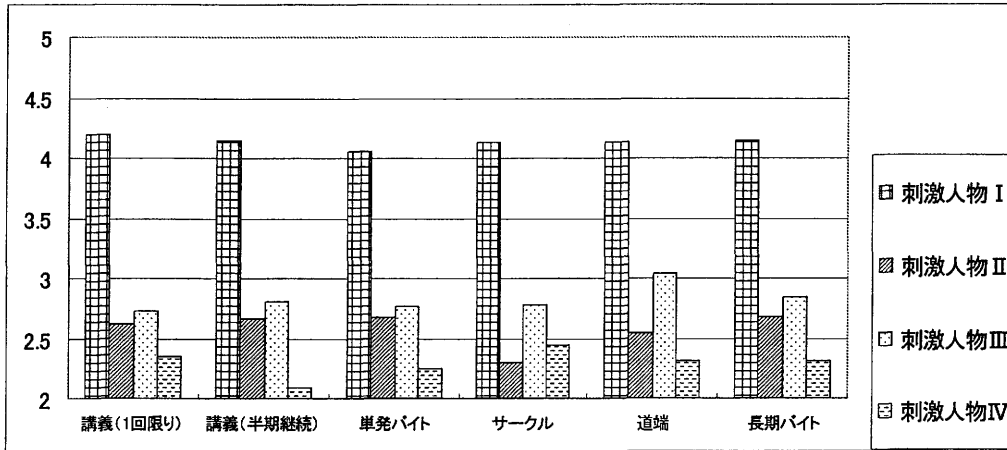


Figure 1 各刺激人物における各初対面場面の「個人的親しみやすさ」因子得点平均

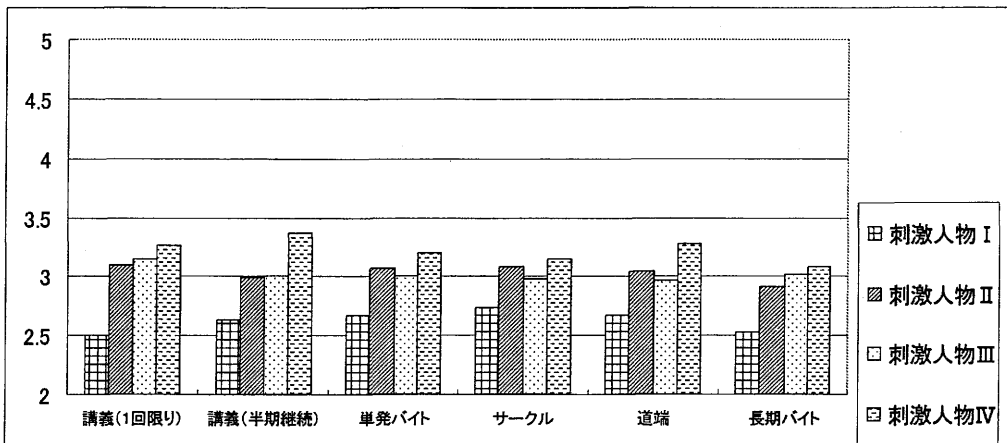


Figure 2 各刺激人物における各初対面場面の「社会的望ましさ」因子得点平均

の結果、「講義（半期間継続）」場面と「サークル」場面の間に有意な差がみられた。つまり、「講義（半期間継続）」場面の方が「個人的親しみやすさ」因子上での認知が他に比べて低いことが読み取れる。

IV. 考 察

1. 仮説について

「個人的親しみやすさ」、「力本性」、「社会的望ましさ」の3つの因子に対して各刺激人物がもつ因子の得点から仮説について検討した。仮説は、同じ人物に対する紹介文であっても、その背景となる場面状況によって認知されるパーソナリティは異なるというものであった。この仮説を検証するために、6人の刺激人物において、それぞれの初対面場面を独立変数に、パーソナリティ評定尺度の因子分析結果から得られた各因子の合成得点を従属変数として1要因の分散分析を行った。その結果、「力本性」因子では、どの刺激人物にお

いても有意な差はみられなかった。「力本性」因子は、「積極的な－消極的な」や、「内向的な－外向的な」などの個人の意思の強さや活動性を表すものである。本研究は状況設定として「力本性」の認知を変化させるような操作を直接行っていないこと、さらに、本研究で設定した刺激人物の紹介文の中には「力本性」を表す記述があったことを考え合わせれば、この認知次元における状況効果が現れていないことは理解できる。

「個人的親しみやすさ」因子では、親密性は高いが、認知者に対する関係期待は低い刺激人物Ⅱと、親密性は低いが、認知者に対する関係期待は高い刺激人物Ⅲと、親密性、認知者に対する関係期待の両方が低い刺激人物Ⅳにおいて有意な差がみられた。つまり、同じ刺激人物であっても、初対面場面によって親しみやすさの程度が異なるという結果である。

また、「社会的望ましさ」因子では、親密性は高いが、認知者に対する関係期待は低い刺激人物Ⅱと、統制人物である刺激人物Ⅵにおいて有意な差がみられた。これは同じ刺激人物であっても、初対面場面によ

て社会的に望ましいと感じる程度が異なることを示している。

これらのことから、同じ人物であっても、その背景となる初対面場面が違えば、パーソナリティ認知の注目される側面が異なるということが示唆されていると考えてもいだろう。つまり、仮説は支持されていると言える。

今回、認知者に対する親密性、関係期待の両方が高い刺激人物Ⅰは、3つの因子全てにおいて有意な差はみられていないが、これは、親密性や対人期待の高い人物に対する認知には、場面の違いを超えた強いインパクトがあるのかもしれない。従来から指摘されているように、socio emotionalな魅力が高く、自己に対しても好意を抱いている人物に対する認知には、状況的な要因がもつ効果が薄いことを表していると考えられることもできる。

2. 対人関係期待と親密性について

「個人的親しみやすさ」因子において、本研究で設定した「課題志向性（社会的望ましき）」の次元に対応する「講義（1回限り）」場面と「講義（半期間継続）」場面、「親密性（個人的親しみやすさ）」の次元に対応する「単発アルバイト」場面と「サークル」場面との認知の違いに注目したところ、親密性が低いが対人関係期待の高い刺激人物Ⅲにおいては次元による大きな差はみられないが、親密性、対人期待が共に低い刺激人物Ⅳにおいては、比較的大きな差がみられた。刺激人物Ⅳにおいては、「講義（1回限り）」場面の方が「講義（半期間継続）」よりも、そして「サークル」場面の方が「単発アルバイト」場面よりも個人的に親しみやすいと感じられていた。つまり、対人関係期待が高い人物である場合には、大きな差は生じないが、対人関係期待が低い人物である場合には、個人的親しみやすさに大きな差が生じていたということである。さらに、課題志向的な状況では重要性の低い状況の方が親しみやすくなるのに対して、親密性の状況では重要性の高い状況の方が親しみやすさが増して認知されている。また、親密性は高いが、対人関係期待が低い刺激人物Ⅱにおいては、「単発バイト」場面と「サークル」場面において大きな差がみられたが、「講義（1回限り）」場面と「講義（半期間継続）」場面の間では大きな差がみられていない。こうした結果は、親しみやすさの認知においては、関係期待の有無の意味が状況によって異なっていることを示唆するものであり、状況の性格と相手との相互作用期待が、相手のパーソナリティを判断する際にどのような機能を果たしているのかを検討してみる必要があることを示している。

「社会的望ましき」因子においても同様に比較してみると、刺激人物Ⅱにおいては、「講義（1回限り）」場面と「講義（半期間継続）」場面との間にわずかながら差がみられたが、「単発バイト」場面と「サークル」場面との間には差がみられていない。「社会的望ましき」因子については大きな差がみられず、親しみやすさ次元での考察のような関係がこの次元上では確認することができない。これは、本研究で提示した刺激人物の特徴が「個人的親しみやすさ」次元上での認知を変化させることをねらったものであるため、状況差が析出されなかったことは、あらかじめ予測できていたことと一致する。

本研究において、初対面場面におけるパーソナリティ認知には、被認知者の要因が大きな影響をもたらしていることが示されたが、初対面場面と被認知者の相互作用も確認されており、初対面場面という状況的要因が、パーソナリティ認知に少なからず影響をもっていることが示唆された。本研究で設定した初対面場面は、廣岡（1990）に基づき、「課題志向性（社会的望ましき）」、「親密性（個人的親しみやすさ）」、「不安」のそれぞれの次元と、大学生が、何らかの対人関係を継続するために重要であるか、重要でないかという重要性の次元の観点から6場面を設定したが、その初対面場面も、講義場面などの大学生にとって公的な活動、アルバイト場面などの私的な活動と他にも様々な観点から考えることができる。堀毛（1983）は、状況認知に関して因子分析による検討を行い、状況認知に関わる基本的な次元として、「formality」、「協調性」、「対等性」、「親密さ」の4つの次元を見いだしている。このことから、今後、さらに場面がもつ性格をさらに明確化し、認知者による状況に対する認知が、被認知者へのパーソナリティ認知にどのように影響をもたらすのかを検討する必要がある。

本研究では、被調査者を大学生とし、認知者と被認知者との関係を友人関係という対等な関係と設定して検討を行ってきた。出会いという場面においては、認知者と被認知者の関係性はこのほかにも非常に多様である。教師と生徒という関係や、会社の上司と部下、またはカウンセラーとクライアントという関係もある。相手との関係において、認知者のおのおのが持っている期待と、被認知者が認知者に対して持っている期待もまた様々であろう。状況が持つ性格に加え、関係期待の持つ性格を明確にしなが、出会いの場面におけるパーソナリティ認知の認知モデルを構築していくことが必要であろう。

引用文献

- Bowers, K.S. 1973 Situationism in psychology: An analysis and a critique. *Psychological Review*, 80, 307-336.
- Forgas, J.P., Argyle, M., & Ginsburg, G.P. 1979 Social episodes and person perception: The fluctuating structure of an academic group. *Journal of Social Psychology*, 109, 207-222.
- 廣岡秀一 1985 社会的状況の認知に関する多次元的研究 実験社会心理学研究、25、17-25
- 廣岡秀一 1990 パーソナリティ認知に及ぼす対人場面の効果-対人的コミュニケーション場面における検討-愛知淑徳短期大学研究紀要、29、75-90
- 堀毛一也 1983 状況認知に関する因子分析的研究-対人認知における人と状況との相互作用分析にむけて-盛岡短期大学研究報告、34、83-91
- 池上知子 1997 自己スキーマの望ましさの相違が印象形成課程に及ぼす影響 社会心理学研究、12、172-182
- Michel, W. 1968 *Personality and assesment*. Willey.
- 宮本聡介・山本真理子 1994 連続行動の観察場面における観察目標の効果 心理学研究、65、371-376
- Rosenthal, R., & Jacobson, L. 1968 *Pygmalion in the classroom: Teacher expectation and pupils' intellectual development*. New York: Holt, Rinehart & Winston
- Shrauger, J.S., & Altrocchi, J. 1964 The personality of the perceiver as a factor in person perception. *Psychological Bulletin*, 62, 289-308
- Tagiuri, R. 1958 Introduction. In R.Tagiuri & L.Petrullo (Eds.), *Person perception and interpersonal behavior*. Stanford University Press.
- 弓削洋子 1994 対人関係の親密さの変化による対人認知の変容 心理学研究、65、355-363
- Walter H.Crockett, Sharon.Mahood & Allan N.Press 1975 Impressions of a speaker as a function of set to understand or to evaluate, of cognitive complexity, and of prior attitudes. *Journal of Personality*, 43, 168-178

<資料>

<資料1：場面①「講義（1回限り）」場面（「課題志向性」次元、対人関係における重要性-低）>

あなたは、ある講義を受講しています。その講義では毎回隣に座る人とペアになってその日の講義の間だけ一緒に活動することになっています。あなたは、ある日の授業で偶然隣に座ったAさんとペアになって活動することになりました。Aさんとは、今までペアになったこともなく、お互い初対面です。

<資料2：場面②「講義（半期間継続）」場面（「課題志向性」次元、対人関係における重要性-高）>

あなたは、グループ活動を中心とした演習形式の講義を受講することになりました。この講義では、半期の間グループで討論をしたり、発表をしたりしなければならず、講義以外にも時間を割いてグループで話し合いをしたり、作業をしたりしなければなりません。あなたはそこで同じグループで活動することになるAさんに出会いました。Aさんとは今まで同じ講義を受講したこともなく、お互い初対面です。

<資料3：場面③「単発アルバイト」場面（「親密性」次元、対人関係における重要性-低）>

あなたは、一日限りのアルバイトをすることになりました。アルバイトの合間の休憩時間にあなたは同じアルバイトをしているAさんに出会いました。Aさんとはこれまで会ったことがなく、アルバイトの間も話をしたことがなく、お互い初対面です。

<資料4：場面④「サークル」場面（「親密性」次元、対人関係における重要性高）>

あなたは何か新しいことに挑戦したいと思って新しくサークルに入ることになりました。あなたはそのサークルの初めての集まりで、同じサークルに所属するAさんに出会いました。Aさんとは今まで会ったこともなく、お互い初対面です。

<資料5：場面⑤「道ばた」場面（「不安」次元、対人関係における重要性-低）>

あなたは大学のキャンパス内を歩いていて同じクラスの友人に会いました。あなたはそこでその友人からAさんを紹介されました。Aさんとは今まで会ったこともなく、お互い初対面です。

<資料6：場面⑥「長期アルバイト」場面（「不安」次元、対人関係における重要性-高）>

あなたは長期アルバイトをすることになりました。初めてアルバイトに行った日、仕事を教えてくれる人として同じアルバイトをしているAさんを紹介されました。Aさんとは今まで会ったこともなく、お互い初対面です。

＜資料7：人物Ⅰ「親密性－高・認知者への対人関係期待－高」＞

○さんは、M大学の学生であなたと同姓で同じ歳です。いつも明るくて、友達と話をすることがとても好きです。また、初対面の人にも自分から気さくに話しかけられるような人なっつこい人です。あなたへの印象はよく、今後も友達として一緒にどこかへ遊びに行ったり、食事に行ったりしたいと考えています。

＜資料8：人物Ⅱ「親密性－高・認知者への対人関係期待－低」＞

○さんは、M大学の学生であなたと同姓で同じ歳です。いつも明るくて、友達と話をすることがとても好きです。また、初対面の人にも自分から気さくに話しかけられるような人なっつこい人です。しかし、あなたへの印象はあまりよくないようで、今後はできればあなたとはあまり関わりたくないと考えています。

＜資料9：人物Ⅲ「親密性－低・認知者への対人関係期待－高」＞

○さんは、M大学の学生であなたと同姓で同じ歳です。人付き合いが苦手で、初対面の人には自分から話しかけることがなかなかできません。また、少し自分勝手なところもあって、自分のことを優先しがちな面のある人です。しかし、あなたへの印象はよく、今後も友達として一緒にどこかへ遊びに行ったり、食事に行ったりしたいと考えています。

＜資料10：人物Ⅳ「親密性－低・認知者への対人関係期待－低」＞

○さんは、M大学の学生であなたと同姓で同じ歳です。人付き合いが苦手で、初対面の人には自分から話しかけることがなかなかできません。また、少し自分勝手なところもあって、自分のことを優先しがちな面のある人です。あなたへの印象はあまりよくないようで、今後はできればあなたとはあまり関わりたくないと考えています。

＜資料11：人物Ⅴ「親密性・認知者への対人期待を感じさせない人物（統制人物）」＞

○さんは、M大学の学生であなたと同姓で同じ歳です。県外の出身で、M大学の近くで独り暮らしをしています。大学では、講義が終わった後、サークル活動をし、休日はたいていアルバイトをしています。また、スポーツが好きで、大学が休みの日にはよく近くにある小学校まで友達とスポーツをしに出かけています。

＜資料12：人物Ⅵ「親密性・認知者への対人期待を感じさせない人物（統制人物）」＞

○さんは、M大学の学生であなたと同姓で同じ歳です。県外の出身で、M大学の近くで独り暮らしをしています。大学では、講義が終わった後、サークル活動をし、休日はたいていアルバイトをしています。また、音楽を聴くことが好きで、大学が休みの日には友達とコンサートやライブに出かけています。

